

後藤和夫先生を偲ぶ

愛知大学 牧野由郎

7月23日、後藤先生の訃報を信州の旅先で受けた私は、予定を変更して豊橋へ急ぎ帰った。車を運転しながらも数々の想い出が、車窓の景色の移り変りとともに走馬燈のように走り去っていった。30年ほど前には、前期の講義が終るのを待ちかねて、先生とと一緒に志摩漁村の調査に出かけていた7月に、今生のお別れをするために豊橋へ戻る無常をかみしめながら……。事務局から先生の追悼文を依頼されたものの、先生の想い出が多過ぎて、何を一体、どうまとめてよいか、追慕の念のみ重なって一向に筆が進まない。

愛知学芸大学（現教育大学）から、昭和38年に奈良女子大学に移られてからも、愛知大学へのご出講をお願いし、月曜日にお逢いするのを楽しみにしていたが、その後先生が文学部長になられ、昭和57年から奈良女子大学長の激職につかれて以来、お目にかかる機会が激減してしまった。先生は任期満了の6年目の後半から体調を崩され、最後の卒業式には告辞を述べられることすら大変だったと聞く。当時の病名は肺梗塞だったが、帰豊された先生からお伺いした病名はパーキンソン症候群という難病であった。だから、直接の死因は肺炎ではあったが、自宅に戻られてからの先生の8年間の生活は、いかに病状の進行を遅らせるかという、文字通りの闘病生活であった。

先生の社会学会でのご活躍はさておき、村研では創設期から、中核的役割を担われ、村研の発展に多大の貢献をなされた。私と先生とのご縁も、多少なりとも評価された志摩漁村の研究も、村研と先生あってのことであった。村研は昭和28年に創設されたが、その基礎を確立したのは、東北大グループのお世話による、今では伝説ともなった昭和34年の鳴子大会であった。私が先生とお話しできるようになったのもこの大会からである。

思えば、夜にまで及んだ共同体に関する学際的な激論を終えた翌日、竹内利美先生に案内されて、後藤先生をはじめ故川越淳二、中野卓、故橋本龍太郎、服部治則等々の諸先生方とともに、秘境、鬼首に秋晴れの一日を探索した。かけだしの私などお供する立場にはなかったが、愛知大学がその年度の事務局を務めた関係から参加する榮に浴したわけである。静々たる先生方にはさまって恐縮していた私に同郷のよしみもあってか、先生はあのにこやかな笑顔で親しく話しかけて下さった。その時のことが私には終生、忘れ得ぬ貴重な想い出になっている。同じような経験をもたれる村研会員の方々も多々おられるのではないかだろうか。こうした些細なことにも先生のお人柄が集約されているように思われる。

後藤・川越先生を中心に、昭和35年から始まった志摩漁村の研究も、じつはこの鳴子大会の共同課題「村落共同体」に触発されたものである。先生のご業績を逐一ここで述べる紙幅をもたないが、先生の鋭い問題関心、徹底した資料収集、精緻な分析による理論の構築過程は、すべての論文の行間にまで滲みでている。私は志摩漁村の共同研究を通して、先生の穏やかで、他人に対するこまやかな配慮を忘れないお人柄の中に秘められた、学問に対する厳しい姿勢、ひとつの語句、ひとつの文章へのこだわりに、どれだけご指導をうけたことか語りつくせない。

自然を愛し、草花を愛し、絵画を楽しんだ先生が、なぜあの憎き難病に苦しまねばならなかつたのか、いまさらながら世の無情を恨みたくなる思いである。いまも私の書斎では、20年ほど前に、新築祝として先生からいただいた掛時計が、夜のじまをぬってコチコチと時を刻んでいる。

謹んで先生のご冥福をお祈りする次第である。